



香川県

面積1,876.52平方キロ、人口約100万人。瀬戸内海国立公園の中心、四国の北東部に位置する全国で最も小さな県。古くから水不足に悩まされたことから、県内に1万4,000カ所以上のため池があり、限られた水の有効活用による農業が実践されてきた。瀬戸内海には小豆島など多くの島々が点在し、2010年7～10月、7つの島と高松市を舞台に「瀬戸内国際芸術祭2010」が開催された。

知識・経験・人材をフル活用して

まるでおわんを逆さまにしたような形の小さな山々の間に点在する、数多くのため池。雨や河川に恵まれず、ため池を使った節水農業を古くから実践する香川を象徴する景観だ。8月、この香川の原風景を舞台に、ため池を利用した水管理について学ぼうと、アフリカやアジアのJICA研修員たちがこの地を訪問した。「ため池は、安定した水の確保や効率的な水の管理に大きな役割を果たしており、地域の農業を支えているんです」。県の土地改良課や「水土里ネット香川※」など水資源管理を担当する職員の説明に、研修員たちは終始、熱心に耳を傾けていた。

「農家が協力し、苦勞して地域で水を分け合ってきた香川の経験を、同様に水不足に悩む国や地域のために少しでも役立ててほしい」。そう話すのは、香川県総務部国際課の六車桂さん。「多くの関係者の協力で実りある研修になった」と喜ぶ。

「国際交流」「外国人住民への支援」と並ぶ国際事業3本柱の一つとして、「国際協力」の積極的な推進に努める香川県。県が持つさまざまな分野の知識や技術、ノウハウを生かし、研修員の受け入れや草の根技術協力事業などでJICAと連携し、精力的に香川発の国際協力に取り組んでいる。中でも特徴的なのが、02年から続け

“香川らしい国際協力”で人づくりを

医療や農業、行政など、県内のさまざまな経験・知識・人材を生かし、国際協力に積極的に取り組む香川県。真心を込めた香川発の支援が、開発途上国の人づくりに貢献している。

香川県



2010年8月、JICAの研修「農家組織によるため池を利用した地域の水管理」で、県内のため池を訪れたアフリカやアジアの研修員

“香川らしい国際協力”で人づくりを



香川県の救急医療の現場を視察するカンボジア人医師。救急車にも同乗し、現場に立ち会った

て実施しているJICA草の根技術協力事業だ。「香川らしい国際協力プロジェクト」と名付けられたこの取り組みでは、ラオスやカンボジア、ベトナムなどこれまで5カ国を対象に、畜産・農業、水産、環境、行政改革、医療などさまざまな分野で支援を展開。豊富な知識と経験を持つ県内の専門家を現地に派遣するとともに、各国の研修員を香川に招き、研修を行ってきた。

香川の真心を写す写真展

「この設備では、軽度の骨折の処置程度しか対応できないのでは」。県が08年からカンボジアで実施している「医療人材育成プログラム」で、県立中央病院救命救急センター部長の佐々木和浩さんと看護師の宮川公伸さんが、初めて首都プノンペン市内の病院の手術室を訪れた時の言葉だ。話には聞いていても、施設も医療器具も満足にそろわない現状をいざ目の当たりにすると、「普段、最新の医療器具による高度な救急医療が当たり前の環境にある自分たちに、一体何ができるのか」と考え込んだという。

だがそこで心に浮かんだのは、モノのなかった時代から、人々の情熱と勤勉性で今を築き上げてきた日本の経験だった。「自分たちにできることは、意志と熱意を持った医療人材を一人でも多く育てること」。現地の医師や看護師のために、基本的な救急医療や応急処置に関するワークショップを開催

し、終了した後も救急医療はどうあるべきか、彼らと熱い議論を交わした。そこでは、勤務態度や医療従事者としての責任など、厳しいこともあえて伝えてきた。そして現地では、日本で学んだことを生かし、救急医療の知識や技術の向上を促進するための推進委員会の設立準備が始められるなど、支援の成果が芽生えつつある。

「ベトナム・ハイフォン市一般行政人材育成プログラム」では、07～09年に行政官18人を香川県に招いて研修を実施。六車さんは「体制が異なる国の行政担当者が香川から学べることはあるのか、当初は不安だった」と話す。実際には、公務員としての理想像などを考えを同じくする点も多かったという。中でも研修員が感心したのは、講義の時間を超えても熱心に質問に答えたり、急な要求でも資料をかき集めてくれるなど、手を抜かず、自分たちのために可能な限り協力しようとする県職員の姿勢だった。「ベトナムでも、香川県のような公務員を育ててくることが伝わったことが実感でき、うれしかったですね」。

こうした取り組みを県民に広く知ってもらおうと、JICAと香川県が毎年初春、県庁舎で行っている恒例のイベントがある。途上国で活躍する県の専門家や香川出身のJICAボランティアの雄姿、香川を訪れる研修員たちの真剣な様子などを鮮やかな写真で紹介



2010年からはバラグアイで、農産物の活用に関する支援を開始。9月には県の農業分野の職員が現地調査や研修を行った

2006～08年にカンボジアで実施した環境技術支援では、現地で大気汚染の調査手法などを伝えるワークショップを開催



介する、「国際協力写真展」だ。

「多くの来庁者が足を止め、香川らしい国際協力」を通じて何かを学ぶ途上国の人々の姿に見入っています」と六車さん。「限られた人員、時間で、香川県にできる国際協力は何かと悩むこともあります。しかし、その中でも相手を思い、最大限のお手伝いをする。そこそそが私たちの国際協力の形。どんな新たな成果が写真に残されているか、来年の展示が今から楽しみです」。その言葉に、香川県の国際協力に込められた「真心」を感じた。